

子起由

支一田

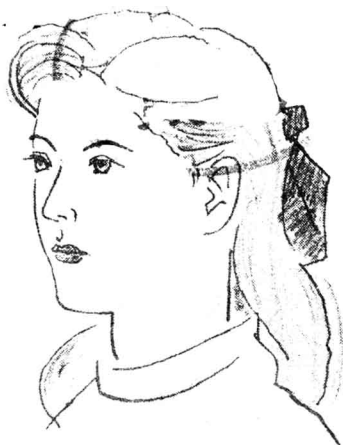


.....連続放送劇

NHKラジオ新聞連載

由起子

菊田一夫



寶文館版

由起子

第1部

180円



昭和二十九年十一月二十五日 第一刷発行

著者

菊田 一夫 きくた いちふ

発行者

東京都千代田区神田錦町三ノ二〇
株式会社 宝文館 たからぶんかん

代表者 高橋 長夫 たかはし ながお

印刷者

東京都新宿区山吹町三二
早坂 善太郎 はやさか ぜんたろう

発行所

東京都千代田区
神田錦町三ノ二〇 株式会社 宝文館 たからぶんかん
電話・(29)三〇一九 八七四六 振替・東京二八〇

三恵社印刷・大光堂製本

序

吉 川 義 雄

放送文化賞を贈られた時、「いやア、どうも僕なんか」と、ごく自然にもじや／＼させた頭髪の上に、己が手を当てた姿は、到底、どうひつくり返して見ても、劇詩人菊田一夫の概念が引き出させるものではなかつた。連続放送劇「君の名は」の放送時間になると、銭湯の女湯がカラになるとの噂が飛び出すと、「弱つちまふな、さうですか」と掌をもみ合せて、はにかんだやうにクル／＼と踵を廻転させる。小説「君の名は」が、ベスト・セラーにのし上つて、これが、全国的な「君の名は」ブームになり、更に映画化されて、日本映画界の観客動員の新記録を作ると、「あたしやア、決して俗うけの、おもねつた作品を書いてゐるんぢやアありませんよ。ね。判つてくれるだらうけど」と、両肩をすばめては、又、微かに動かして四辺の皆を見廻す。

かうした菊田さんは、どうして自己に対して、他の作家のごとく昂然となり得ないのかと思はれる。傲然となれないことは判つてゐるが、所謂微苦笑に似た笑みを浮べた、テレた姿ばかり

り見せる菊田さんである。では、この善意の、弱気一方の姿態から、どうして、あの長い息つぎの、自己のベトスを決して終局的には乱すことのない、温まるやうな大きな波動を持つてゐる作品が生れてくるのだらうか。

菊田さんのテレ姿に、嘘、いつはりのあり得やう筈がない。だから、随つて、これは「隠れ簑」ではないのである。他人にはさう思はれるでもあらう姿は、いつも自己反省の姿なのではあるまいか。こんな謙虚な反省を、而も昂然たるべき時期に行つて自己を常に脱皮して行く。或る意味では、逆に、実に怖い人なのである。だから、勝つておごらず、一歩下つたところから、次の作品の土台を築いてゐる。つまり、継ぎ目がないのである。

この人には「隠れ簑」を必要としないのである。人生観照の物差は、あのあまひのうちに、また次の段階を写し出してゐる。「由起子」の放送劇を聴くと「君の名は」ブームにあつて、このブームに漬るが如くにして、物差しをづらしてゐることが、判る。「真知子」と「由起子」の歩み方にも見られよう。

旅人とわが名よばれん初しぐれ

この旅人は、謙虚だが、播らがないのである。

(筆者・NHKテレビ局長)

由起子 第1部 目次

断崖	三
浅草公園六区	八
カジノ・フォーリー	一五
* カジノ・フォーリー(続)	一七
夜の浅草	一九
浅草の喫茶店	二三
* 街の灯	二五

誕生日の客	三〇
* 誕生日の客(続)	三三
私生児	三六
年長者	四一
* 年長者(続)	四三
* 夢	四九

教師と生徒	五
歌舞伎座	六
＊	
歌舞伎座(続)	六
浅草の灯	七
＊	
広洋軒	九
伯母の秘密	五
＊	
伯母の秘密(続)	六
きちがい娘と鬼婆	八
＊	
潔白の証明	八
夜の隅田川	九

＊	
夜の隅田川(続)	九
旅の踊り子	一〇
＊	
激情	一〇
浅草合羽橋	一一
＊	
第六感	一二
嫉妬	一三
＊	
旅愁	一六
木馬館事件	一三
＊	
木馬館事件(続)	一五

上野山三吉の告白……………一三七

*

湯島境内……………一三〇

退校処分……………一三〇

疑惑……………一三〇

*

温い手……………一三〇

失踪……………一三〇

*

二・二六事件……………一三〇

瀬戸内海……………一三〇

旅愁……………一三七

*

旅愁(続)……………一三〇

雨、因ノ島……………一三八

*

海のジブシイ……………一三八

激情(一)……………一三八

激情(二)……………一三八

*

激情(三)……………一三八

激情(四)……………一三八

*

結婚申込み……………一三八

不幸の芽……………一三八

じゃじゃ馬……………一三七

婚約……………一三〇

春の嵐	＊	三三
奥入瀬川	＊	三七
奥入瀬川(続)		三三
写真		三二
烈風	＊	二五
遁走(一)		三〇

遁走(一)		三三
遁走(二)		三七
遁走(三)		三九
就職	＊	三三
嵐の翌日		三六
訣別		三八
東京の風		三三
傷痕		三五

装幀 寺田竹雄

M

テーマ

Est

Dn

B.G.

SE

山脈の頂きを越える風さむざむ

序詞

山は嶮しけれど

あの山 越えねば

里の灯は見えず

旅人は 涙こぼして

ただ ひとり……

此の道を登りぬ

M

テーマ

Up
……
C.O.

アナ

連続放送劇 由起子

斷崖

網走から北に三里、能取岬の断崖の裾を洗うのは、オホーツク海の波瀾である。

そのあたりの浜辺に住む人は、十月の末頃から毎夜のように遠い海鳴りをきく。その海鳴りはオホーツク海が凍結しはじめる音である。そして十一月、十二月、陸地に近い海は完全に氷の平原と化してしまうのだが、その凍結が徐徐にはじまろうとする十月のはじめ、海は寒さに縛られる前の恐怖でちがいのよう荒れ狂っていた。

霧の深い海は静かなはずだったが、その日は濃霧が海上一面にたちこめて、やがて波が静まるか、霧が晴れるか、どちらかの結着がつくにしても、能取岬の燈台の霧笛は、その断崖の頂まで躍りあがつては白い野薔薇の花びらのようなしぶきをまきちらす波浪と、息もできないようなガス

の深さに怖びえ、山犬のように吠えつづけた。

女は、乳白色のガスと波のしぶきに濡れながら、ゆつくりと断崖の突端にむかつて歩いていった。

くだけ散る波瀾のあほりをくつて、その女の兩足を包むスラックスは、はたはたとしたためき、黒いカシミヤのオーバー・コートに包まれたその身体は、いまにも吹き倒されそうによろめく。

その女……としは、もう二十五、六をすぎているのであろうか。もしかすると、三十にも近い年頃なのかも知れない。だが、その血の氣を失った女の顔は、その心のなかに秘められている苦悩の重さにもかかわらず美しかった。

死の決意を胸のなかにたたえているのか、とすれば、この女のこれまでの生活は苦悶の連続であつたはずだ。にしては、その眼にも、眉にも頬にも美しい唇にも、指にも、その疲れが見えない。疲れはどこかに出ている筈だ。或はその疲れや陰影を掩いかくすだけの努力や、心のゆとりがこれまでの彼女のどこかにあつたのだとすれば、それは、

もしかしたら、世の中のはげしい風浪に耐えながら、どんなときにも誰かを……或る人を……愛して愛しつづけてきた、愛情のかがやきが、させたことなのかも知れない。

いま、そのはりつめていた愛情の糸は、何かの障害によつて、ぶつつりと断ちきられたのであろうか。

女は歩んだ。そして立ちどまつた。

そこは直ぐ足許にオホーツク海の波浪の舞い狂い、白くただけで散る花びらを見下す能取岬の突端であつた。

霧笛が鳴る。ベツタリとねばりつくような濃霧のなかに心もとない山犬のように霧笛が吠える。

女は、何を考えているのか、見えない海を見つめて、そこに佇ずんだまま動かかなかつた。波浪のあほりが、女の頭髮をわかめのように吹き散らし、そして吹きすぎる。

すぐ頭の上に霧笛のきこえる断崖、能取岬の突端は、その女にとつては、死と生の分岐点なのかも知れなかつた。

「もしもし……あんだ……あんだ、そこで何をしているんですか」

霧のなかで誰か、男だ、声をかけた。その女の背中のあたりだつた。距離はかなりあつた。その男の足音は迫り迫つてきた。直ぐに真横まで近ずいてきた。その男は黒い制服を着た燈台の看視員だつた。

「もしもし、あなた、此処で何をしているんです……危ないですよ」

看視員は、その女のどこかしらうたけた美しくしきを見ると、瞬間気押されたようだつたが、しかし、無言のまま動きそうにもない、その女の強情さに次第に腹を立ててきたのか、声をあららげた。

「あんだ……此処は崖つぶちで危ないですからね、もつとあちらのほうにいかれたら如何ですか。一歩足を踏み込ませたら、波にさらわれてね、命はありませんよ……え、あんだ、何をしているんです。こんなところに突つ立つて……」

断りたつた断崖も白い燈台も何もかも一諸くに叩きつぶすような轟音とともに、波のしぶきが看視員の黒い制服

の背中を濡らし、女の頬を濡らす。

その女の見ひらかれた眼は虚ろで、まばたきをしようとしなかった。その頬をつたつて流れるものは、波のしぶきか、もしかしたら涙かも知れなかった。

「あんた、こんなところに飛び込んだら……五分もたたないうちにね、五体はバラバラですよ……脅すわけではないですがね」

ときたま、こんなところにも自殺をもうろんで、はるばると旅をしてくる人間があるのだろうか。燈台の監視員はその女の心のなかを見抜いたように喚き立てた。

「さあ、早くあつちへいきなさい」

此処で死なれたら、ただでさえ報われることの少ない、こんな辺境の燈台監視員達が、また一苦勞である。

(こんなところで死なれて耐えるものか)

と、この監視員は思っているのかも知れない。

ふと、そう思つたら、それが心のゆるみをともしなつた。

「死んだあとにも美しくありたいと思うのは、誰しもの人

情かも知れませんか」

女は、監視員をみないでいつた。

「でも、ほんとうに死にたいと思つている人間だつたら、誰が死んだあとの身体の形まで考えるでしょうか。……なかには虚栄心を満足させるために死ぬ人もあるかも知れません。でも、死んだあとの美しさが、何になるのでしょうか。聞いから力が尽きて、死によつて安息を願う人間なら、死んだあとの死に態しぐさなど問題ではないはずですよ……ただ身体を安めることができれば……永遠にです……それでいいのです」

女の言葉は、そこにはいない彼女の背後の人々……つまり、眼に見えない社会という大きな影をもつ人間にむかつていつている言葉だつた。と、いうことは、彼女が社会から追いつめられた女なのだ、ということなのだろうか。女は、そこに燈台監視員がいることも忘れていた。彼女の心のなかにあるのは、彼女自身の過ぎきし人生のそのときどきの姿だつた。それは、悲しみの姿ばかりとは云えなかつた。

た。歎こびの姿もあつた。それを、いまふりかえつてみて生きるべきか死ぬべきか、彼女自身の心を決めなければならなかつた。

だが、その女の悲しみと悶えは、彼女には何の縁もない燈台看視員には通じなかつた。彼に判つたのは、この見知らぬ美しい女の表情から、まだ不確かながら、死の決意が消えてゆきつつあるということだけだつた。それでも、この男は、ほつと息をつくことができる。

「だが、あんたは、もう死ぬことはやめたんだらう」

女は、はじめて看視員の顔をみた。そのかすかな笑顔には哀しみがただよつていたが、しかし美しかつた。

「御心配かけて申訳ありません。御詫びいたします」

「燈台のランプに油をさしに、塔の上に、あがつていたんだ。ひよいと下を見たら、あなたが、この突端のほうへ歩いていく姿をみたんでね……でも、よかつたよ」

看視員は、彼の忠告によつて女が死を思いとどまつた、と思つたらしかつた。

はつとする間もなく、女が歩き出そうとするのをみると

「あんた、どこへいくのです」

「もう御迷惑はおかけいたしました」

「迷惑をかけないといつたつて、あんた……」

「死ぬことをやめたとしたら、何か生きていく道を考えなくてはなりませんものね……生きていく限りは、それを考えなくてはならないから……」

女はたまつてゐる悩みを吐き捨てるように、溜息をついた。

「私はもう一度……もう一度よく考えます」

崖の突端から、波しぶきに追われるようにして引きかえしてゆく女の姿に、看視員は追いつがつてきた。

「あんた……この土地の人じゃないだらう……宿銭は持っているのかね」

親切な男だつた。年をとつてゐるせいもある。

「何だつたら、村役場まで一緒にいつてあげよう。役場で頼んで旅費ぐらいは借りてあげるよ」

見も知らぬ燈台看視員のそのやさしい言葉が、ふと、胸にしみいるような一瞬だった。

「ありがとうございます」

女は、そのやさしさから逃れ去るようにいった。

「でも、由起子は……いままで、ずつと、いつでも……誰にも頼らずに生きて参りました。これからも、また……誰にも頼らずに生きてゆくつもりでございます。御心配をおかけしましたことだけを、深く御詫び申しあげます。失礼いたします」

とりようによつては、可愛気のない言葉だった。だがその半面、人手に頼らずに生き抜いていこうとする健気な女のかなしみがこめられた言葉だった。

看視員はそこに足をとめた。もうそれ以上は、何を語るのも胸がつまってくるのか、面を掩うて小走りに去つてゆく、見知らぬ女の背中にむかつて、彼は声をかけた。

「気をつけて帰きなさいよ」

看視員が知つたのは、その女の名が「由起子」だという

ことだけだった。

怒濤の吠びはきえた。

霧笛は遠ざかった。

「由起子」と名乗つた女は、町のある方角にむかつて歩いてゆきながら……さて、今夜はどうしよう……これから後の一寸先きさえ判らない人生の前途を考えた。（もしも、今夜の目安がつけば、また明日の行く手も定まるであらう）

いまの由起子には過去はない、未来もない、あるのは、今日唯今の切迫づまつた人生だけである。

だが、由起子にだつて、幸福に似た鬱閉気を味わつた過去もある。悲しみばかりではなかつた。その過去を生きるに都合のいい部分だけ選び出して考えれば、もしかするとこれから後も、生きてゆくための力杖にはなるかも知れない。

由起子は、町への道を歩きながら、ふと、それらを思い出していた。

浅草公園六区

戦前も……かなり前のことである。

そのころは、まだ浅草公園の映画街のなかに瓢箪池があった。鶴の噴水が、いつも水を噴いているところである。

瓢箪池のくびれたあたりに石橋があり、その石橋の上には藤棚……春になると、薄紫の花ぶさがたわわに花弁をひらく。が、映画館に足を急がせる人々は気がつかない。

藤棚のかたわらに茶店がある。池のほとりには、ただ一軒の茶店だが、いつも、ひっそり……

池の裏にあたる伝法院あたりの路から、緑色のセーターを着た若い女が馳^{みなり}けてきた。

六区に遊びにきた客にしては、身装が無難作である。といつて、劇場の女優が幕間を利用して誰かと会う……というには、垢^か抜けのしない姿……。まだ小娘である。

「小母さん、こんにちは……」

セーターの娘は、そこに立ち止ると、藤棚の茶店のなかにむかつて声をかけた。

「あ、田鶴子さんかい……いらつしやい……また、おしろこかい、池のほうのお座敷あいてるよ、おあがり……」

「誰もきてない……」

「ううん誰も……今日はひまなんだよ」

「私を訪ねてこなかった」

「いいえ」

「おかしいな……」

座敷にあがろうともしない、田鶴子という娘をみて、

「あれ……誰かと、待ち合わせかい」

「三時という約束なんだけど」

「三時なら、もう十五分もすぎてるじやないか」

「私のほうもおくれたんだけど……きてくれないつもりなのかしら」

「田鶴子さんも、とうとう……誰かと、ランデブーするよ